

第12話 建武の中興

北條氏が亡び、幕府が倒れて、久しぶりに政権が朝廷に還る。

京都に御還幸

元弘3年5月7日、両六波羅が脆くも亡ぶと、六條忠顕、足利高氏、赤松則村らはおのおの早馬を立ててこれを船上山に奏聞したが、この知らせが行在所に達したのは5月12日でした。後醍醐天皇のご満足はいかばかりであったでしょう。やがて京都にご還幸の準備を命じになり、5月23日、その前日に鎌倉が陥ったことはご存知もなく、いよいよ船上山をご出発になった。御行列は、いつもの例とは違って、頭大夫一條行房、勘解由次官吉田光守の2人の外は、公卿も悉く軍装で供奉し、名和長年、金持景藤、塩冶高貞らの武士が前後を護衛した。同じく武士が警護申し上げたが、去年の春の隠岐への御遷幸の時の御心と比べて、いかに晴れやかに思われた事でしょう。

光厳院を廃す

25日には、御道中で勅を發して、先に執権北條高時がお立てした光厳院を廃して世人の迷いを解かれ、30日に摂津の兵庫にお着きになって、福厳寺という寺にお入りになった。

楠木正成のお迎え

この日、赤松則村父子が500余騎を率いて参上すると、天皇はその忠戦を褒めさせられて、護衛の列にお加えになった。翌1日はここにご逗留になり、2日に兵庫をご出発になったが、この時、楠木正成は7,000騎を率いて、途中にお出迎え申したので、天皇は特に御簾を高く巻かせて、正成を近くお召しになり、「今日の成功は、偏に汝が忠戦のお蔭である」とて、殊に優渥なお言葉を賜ってその勲功をほめられた。ここからは正成が鳳輦の前陣を承わって、やがて西宮にお着きになった時には、新田義貞の早馬の使が馳付け、北條高時以下が悉く亡びたことを奏上したので、上下を挙げて大いに喜んだのでした。

こうして6月4日に京都にお着きになって、先づ東寺に入られると、在京の武士はいうに及ばず、摂政、関白、太政大臣、左右の大将、大中納言以下の百官が、我れ劣らじと競ってお迎えしたので、東寺の混雑は非常なものでしたが、翌5日、この東寺から二條の内裏へのご還幸のご行列は、更に一層目をおどろかすばかりでした。

還幸の御行列

鳳輦の前には六條忠顕が帶劍の役にて供奉し、その両側には帶刀の兵が500人、2列になって、徒歩でご警護した。高氏、直義の2人は、百官の次に、騎馬兵5,000騎を以って護衛をつとめ、楠木正成、名和長年、赤松則村、土居、得能以下の諸将は、その次々に、おのおの旗を靡かせながら、部下の兵を率いて供奉したので、先陣は既に二條の内裏に着いた時にも、後陣の兵はなお東寺の門まで続いて控えて

第12話 建武の中興

いたという事です。都の大路小路に充ち満ちた群集が、この莊嚴を極めた行列を拝した時に、いかに去年のご遷幸の時の事などを思い返して、嬉し涙を浮かべてお迎えしたかは容易に想像されます。去年の3月7日、隱岐に向って六波羅をお立ちになった時から、ちょうど15ヶ月の後に二條の内裏にお還りになったのです。

中央の政治

さて、すでに幕府が亡びて、将軍も執権もなくなってしまったので、久しく武家の手に移っていた政権の回復が完全に成し遂げられたのです。それで、この6月以来は、朝廷でも俄かにご多忙を極めたが、先づ今までの摂政や関白を廃して、御親らお政治をご覧になる事ともなり、嘗てご即位の3年後にお置きになった記録所を復興された。天皇はここにお出ましになって、大事はご自分でこれを決せられたのです。

しかし、戦乱の後を承けて、領地やその他の事に就いての訴訟などが頗る多かったので、そのためには別に雑訴決断所というのを置いて、これに裁判をさせられた。また、兵馬の大権をも朝廷に収められたのですから、そのためには武者所を置いて、武士を支配し、軍事を掌らせられた。

地方の政治

地方の政治もこれを改めて諸国には国司または守護を置かれた。朝廷の役人より任じたものはこれを国司と、武士より任じたものはこれを守護といった。名は異なってもその実は全く同じ職務を執ったのですが、これを公家と武家との両方から任命したのは、思うにその出身に依って功臣に隔てを置かないようにされたのでしょう。しかし、一つはまた、既に地方の武士の勢力が強くて、これを国司の支配の下に置くことができないような事情になっていたためもあったようです。

論功行賞

こうして、勤王の人々に対する恩賞を行われることとなり、天皇は先づ大塔宮護良親王を征夷大將軍となされた。尤も、これは一つの名誉職でして、もとの幕府の將軍のように、天下の政治を執られるのではなかったのです。この時、親王は高野山を去って河内の志貴山に居られたが、やがて赤松則村のお迎えを受けて、6月23日に京都にお帰りになった。

次には諸將の恩賞を決せられたが、天皇は足利高氏を以って勲功第一とお認めになり、御名の一字を賜って、高氏を尊氏を改めさせられた上に、武蔵、常陸、下総の3国を与えられ、なお正三位に叙し、参議に任ぜられた。新田義貞は従四位上に叙せられ、越後、上野、播磨の3国を賜ったが、尊氏の恩賞には及ばなかった。楠木正成は従五位下に叙し、摂津、河内の二国を賜り、名和長年は因幡、伯耆を賜った。

その他、六條忠顕を始めとして、功勞のあった多くの者には、それぞれ領地を賜って国々を治めしめられたが、中でも奥羽地方は殊に重要な土地であるからとて、参議左近衛中将北畠顕家を陸奥守とし、皇子義良親王―後の後村上天皇―を奉じて奥州に下ってこれを治めさせられた。顕家の父

第12話 建武の中興

きたばたけちかふさ したが おもむ ゆうきむねひろ すけ こらい ぶじん こんきよ
の 北島親房もまた 従って 赴き、結城宗広と共に親王をお輔けした。 また、関東は古来武人の根拠
ち さら いっそうじゅうよう なりなが はけん
地でもあって、更に一層重要なところですから、天皇は特に皇子成良親王を鎌倉にご派遣になって、関
しづ たかうじ ただよし さがみかみ たすけ
東を鎮めさせ、足利尊氏の弟の足利直義を相模守としてこれを輔けさせられた。

けんむ ちゅうこう 建武の中興

こうして中央の官制も かんせい ととの せいど あらた せいけん かえ
こうして中央の官制も 整い、地方の制度も 改められて、政権はともかくも朝廷に還ったのであります。
けんむ けんむ しんせい けんむ ちゅうこう
す。 翌元弘4年正月29日、年号を改めて建武とされたので、世にこの新政を建武の中興といいます。

(第12話 けんむ ちゅうこう 建武の中興 終わり。 次は前頁に戻り、 第13話 新政の失敗 へ)